

私から見た 土地改良

NHK解説委員

合瀬宏毅さん

に聞く

NHKにおいて食料、第一次産業を中心とする経済問題を担当する解説委員で、食料・農業・農村政策審議会の委員も務められた合瀬宏毅さん（おおせひろき）に、農業・農村に寄せる想いや、番組制作のご苦心などについてお話を伺った。

聞き手 広瀬 伸

(株)三井住友建設顧問

(一社)土地改良建設協会広報委員長

写真右 広瀬 伸
写真左 合瀬宏毅

ふるさとの山から世界へ、未踏の地への憧れ

広瀬 本日は、公的なお顔ばかりでなく、お人柄も感じられればと考えております。

合瀬 私が生まれたのは、佐賀市と博多を直線で結んだその真ん中ぐらい。大和町（やまと）（現佐賀市）という、全くの山の中です。遊びと言っても、川で魚を捕ったり、鳥を捕まえた**り**ばかりで、春になるとワラビやゼンマイを採ったりしていました。近所には干し柿が名物な地区があり、冬になると子どもたちは柿剥きのアルバイトをするような、そんな地域でした。

今でも、山に行けば何もなくても遊ぶ方法はだいたいわかりますし、食べられるものもわかると**い**った具合です。

広瀬 私なんかの目では山菜が区別できませんが、十分見分けがつくわけですね。

合瀬 大人になっても、キャンプ場で火を焚いたり、魚を釣ったりするのが好きなのは、小さい頃の影響でしょうね。何もない所でい**ろ**んなものを工夫してやること**が**大好きなのです。

広瀬 進路はどのようにお決め

になったのでしょうか。

合瀬 先ほど言ったように、我が家は佐賀市まで、バスで一時間ぐらいかかる山の中です。この狭い所から外に出たいと思っていました。大学は、結局山口に行くことになりましたが、佐賀以上に田舎なのにびっくりしました。そ**れ**でも外に出られたのはうれしかった。

大学時代は小田実の『何でも見てやろう』などが読まれていた時期で、世界中を渡り歩**く**本ばかりを読み漁っていました。

NHKに入ったのは、学生時代、地方局でアルバイトしたのがきっかけです。取材先か



ふるさとの佐賀大和町



らの記者の原稿を電話で受けるとか、三脚を持ってカメラマンに付いて行く。ある時、ヨレヨレの服を着てフィルムを覗きながら編集を徹夜でやっているディレクターの方を見かけました。その時に、いろいろなものを見たり、カメラを片手に、面白い所に行ける仕事はディレクターではないかと考えたのです。世界中の誰も見たことがない所に行きたい。動機はこのことに尽きます。希望は自然番組でした。南極とか海の底とか、そんな所に行きたくて就職先を決めたのです。

NHK入局、番組作りの姿勢

広瀬 最初の勤務地はどちらでしたか。

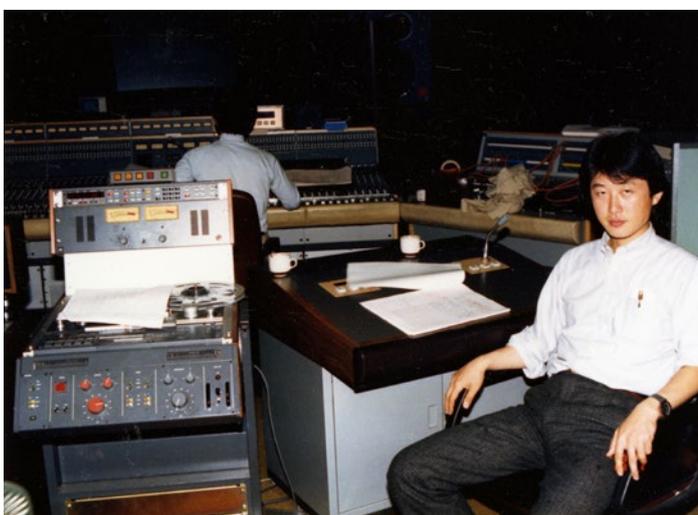
合瀬 鹿児島放送局です。日本の端っこが希望だったので、運よく鹿児島に着任できて嬉しかった。鹿児島は、北は世界最大のナベツル越冬地がある出水市から、南は与論まで南北九〇〇kmと、自然がいっぱいで、サンゴ礁もあります。本当に良い所に来たと、小躍りしました。

でも、自分がやりたい番組と視聴者が面白いと思う番組とは違います。自分が考えたことを番組にするには、会議で提案を通さなければなりません。番組を作って楽しいというより、苦しかった方が多いです。

広瀬 やりたいものと視聴率とのせめぎあいですね。

合瀬 例えば、無人島での鳥の渡りの提案です。鳥が渡ってくるのを見てきれいな、面白いと私自身が思っても、興味の無い人にとっては「だから何だ」でしかなく、それを説得しなければなりません。放送には、報道、ドキュメンタリー、芸能・ドラマなど様々な分野があります。放送の判断基準は面白いかどうかだけです。自分が面白いと思ったものを、どう説明できるかです。

でも、提案が通っても、番組を放送するのは、とても怖い。テレビの視聴率一%は、一〇〇万人の視聴者に当たるとされます。そ



ディレクター時代

んな大勢の人たちが、自分の番組を見る。まさに
私自身が評価される訳ですから、放送の翌日、出
社するのは本当に怖かった。

広瀬 そういう怖さが番組を作り、解説委員を務
められる際の基本線なのでしょうか。

合瀬 受信料をいただいて番組を作っていますか
ら、プロとして耐えうる番組を作らなければなら
ない。どこにニーズがあつて、みんな何を知りた
いのか。私は解説委員として農業問題のプロだと
か言われますが、農業問題のプロではなくて、今
起こっている問題をどう解きほぐして伝えるかの
プロです。

それに、どういう立ち位置でものをしゃべり、
番組を作るのか。農業問題を取材していると、ど
うしても農家の人など取材の対象に影響されま
す。しかし、農業問題は、消費者や納税者の問題でも
ある。面白いだけでは番組は成立しません。ちゃ
んと説明しなければならぬといつも思っています。

朝の顔とプロジェクトものを次々と

広瀬 東京でも制作のお仕事でした。

合瀬 鹿児島で自然番組を主にやってきましたが、
先輩から花鳥風月だけやっていけばいいのと言
われまして、何を自分のテーマにするべきなの
か、ずいぶん悩みました。

広瀬 自然番組のプロとか経済番組のプロになる
とか、専門化していくのですか。

合瀬 徐々にですね。まず地方局では何でもやら



ディレクター時代（取材中、左から2人目が合瀬氏）

されます。人が見たことのないもの、また、スポー
ツ中継など同時進行のものを、生放送で見せるの
はテレビの特性です。そうした意味では、自然番
組も十分、テレビ的なのですが、共感を呼ぶとか
感動させることを考えた時、人に寄り添って作る
番組が大切ではないかと、田中一村という埋もれ
た画家を奄美大島で発掘した先輩から諭されまし
た。

鹿児島時代に自然番組をいくつも作ってしまし
たから、東京では当然、自然番組に配属されると
思っていました。ところが、ふたを開けてみれば

「明るい農村」のチームです。当時、テレビの特
性を生かしたワイドニュースを作ろうという議論
があり、「明るい農村」を廃止して、「にっぽん列
島朝いちばん」という番組を作ることになった
のです。

制作メンバーはもともとが「明るい農村」です
から、地方のネタにめっぽう強い。農業は地域や
人の生き方と密着していますし、自然とも関係が
深い。がっかりはしましたが、まあいいかと思っ
たのです。

広瀬 取材は東京から地方へ？

合瀬 企画は地方局からも出てきますが、東京で
も提案が通れば、行くことができます。世の中は
バブル真最中で、海外のネタも多くなっていまし
た。

広瀬 東京にどのくらいおられましたか。

合瀬 五年です。三年目ぐらいからは「NHKス
ペシャル」のチームに出向していました。「日本
の条件 食糧」という番組では、いくつもの部署
から集まってチームを作り、五〇分番組を三本作
ると、そういう作り方でした。

ところが忙しい。当時、結婚して子どもが生ま
れたのに、一ヶ月くらい海外に行き、帰国して一
週間ぐらいで放送を出し、再び海外へ、という生
活でした。私自身は楽しいのですが、家族のこと
を考えるとよくない。結局、地方転勤の希望を出
し、名古屋に配属されました。それでも半年ぐら
いは東京の仕事をやられました。



海外研修で訪れたニューオーリンズ



アイオワの牧場

広瀬 仕事が進んでくるんですね。

合瀬 ただ、仕事ばかりやっていたのではつまらない。名古屋時代に「クローズアップ現代」が始まり、地方局でも制作することになりました。NHKの注目番組でしたから、予算は多い。地方局には、大変ありがたい番組です。番組を沢山作るからと、当時の上司にお願いして、その代わりと、ニューヨークに海外研修に行かせてもらいました。

広瀬 何をご覧になりましたか。

合瀬 東京で経済番組を多く手がけたこともあつ

て、ウォール・ストリート・ジャーナルのテレビ部門に行きました。ただ、テレビ制作はどれも同じで、一週間も見ればだいたいわかります。じゃあ好きなことをするかと、アメリカ各地を見学です。半年あちこちを回っていたら、東京に帰って来いというので、名古屋に帰らずそのまま東京へ転勤でした。

解説委員の誕生

広瀬 東京へ戻られて解説委員になられたのですか。

合瀬 先輩の解説委員に中村靖彦さんと加倉井弘さんがいらっしやって、後継者を探しておられました。

経済番組のデスクから管理職になり、一、二、三年した時でした。部長から解説委員への打診を受けました。解説委員は一種、独特な世界です。先輩からは、「お前みたいな若い者が務まる所ではない」と言われ、断ったのですが、断り方が弱かった。内示が出てびっくりしました。ただ、与えられた場所でベストを尽くすを信条にしてみましたから、頑張ってみるかと思ったのです。

ところが、ディレクターと記者は、世界が全く違う。面食らいましたね。ディレクターの世界では、映像先行です。映像こそが命で、ナレーションが必要な番組はろくな番組ではないと言われてきました。それが突然、原稿ベースの世界です。ニュース映像は、極端に言えば、記者原稿に画を当てるだけです。

もう一つ、農業問題の特殊性です。一般の経済では、人は合理的な行動をし、ものは市場原理で動く。そう考えればいいので、理解はそう難しくありません。ところが、農業は経済原理で動いてはいけません。産業政策と地域政策の二つで動いているし、政治の力を強く受ける。こういうことが理解できずはじめて政策が分かります。

これはなかなか難しい。野菜の価格高騰など、生活に関わる話題については、視聴者は興味を持ってくれます。問題は構造問題。日本の農業を

どう立て直すかなどは用語も難しく、そこをどう興味深く聞いてもらうか。いまだに苦しみながらやっています。

広瀬 それで、短縮して言えばそこから現在に至るといことなのでしょうけど……。

合瀬 そうですね。実は、農業問題を担当して一つ、意外だったことがあります。もともと世界中を飛び回りたくて入った会社です。経済番組を担当していた時は石油や国際交渉など、世界が取材対象でした。農業では国内主体なのかと思いましたが、実際は全く違っていました。

ご存じのように、日本の食料の六割は海外から輸入されます。BSEは、ヨーロッパから輸入された家畜の餌が原因。TPPやWTOなどのように国際交渉も多い。農業は相当ワールドワイドに構えて取材しないといけないと痛感しました。もう勘弁してくれよと言いたくなるほど難しい分野ですが、「明るい農村」とは全く違う世界で、取材するのはとても面白かったです。

アメリカ国務省から農業視察に誘われたのもこの頃です。アメリカにとって日本は、重要な輸出先です。アメリカの農業を理解してもらおうということだったのだと思います。

ワシントンでの政治家との議論から、アイオワのトウモロコシ畑、遺伝子組み換えの研究施設やテキサスの牧場など、希望するものを全て見せてくれました。視察の途中では、アメリカの農家と懇談もし、日本人は遺伝子組み換えが嫌いなのか



トウモロコシの積み出し施設で

とか質問を受けたり、中国からの野菜輸入に悩んだりしているなど、規模は違うが日本もアメリカも農家の悩みは同じなんだと感じ、大変面白かったですね。

ショックを受けたのは果物の栽培です。日本は土地面積が狭いので、果物は高級果実、例えば一個一千万円のメロンなど、高付加価値を目指さざるをえません。ところが、アメリカではメロンなんて、果物の一つ。大型機械で、ザーツと収穫します。売り物になるのかと思いましたが、スーパーでは結局カットフルーツとして売られ、ホテルの



ワシントンのファーマーズマーケット

朝食でも野菜のように出てくる。生活スタイルを考えれば、高付加価値ばかり目指さなくてもいいのだと気づかされました。

日本でもカットフルーツが急速に伸びています。日本の産地のあり方が、私に若干ずれて見えるのは、そうした外を見てきたからでしょう。

土地改良をどう見るか

広瀬 土地改良については、どのように見ておられますか。

合瀬 見方はずいぶん変わりましたね。

一九八〇〜九〇年代に農業問題を担当した時、公共事業は強い批判を受けていました。コメが余っているのに、コメ作りのための農地整備や、いったん始まったらかなな止められない公共事業などが、大きな取材テーマとなっていました。ですから、公共事業は、どちらかというところ否定的に見ていました。

ただ、農業人口が減ってきた今、国民に食料を安定供給するためには、今以上に生産性を上げなければなりません。その中で、土地改良は重要な役割を持ってきたと思います。

農業の最大のミッションは、国民に食料を安定的に供給することです。ここ二〇年ほどの農業を取り巻く状況を考えてみると、BSEやTPPなど、国民の関心を大きく集める事件や政策変更があり、取材者にとっては、ある意味幸せな時代でした。今は、問題としては地味ですが、農家人口が減り続ける中で、将来にわたって食料を安定的に供給できるのか、その検証がきわめて重要な時代になったと思います。

広瀬 テレビの解説でも、食料自給力は大丈夫かと危惧をお持ちです。近年まで農家五〇〇万戸、農地五〇〇万haでやってきましたが、農地は一割減の四五〇万haで農家は三分の一となり、それで一億二千万人を支えないといけない。しかも単収も落ちていきますから、食料の安定供給という一番基本的な、最大のミッションの実現に懸念を抱かざるをえないわけですね。



鳥インフルエンザ取材で

合瀬 実はここ五年ほど、農産物価格は、徐々に上がってきています。付加価値の向上ならともかく、供給不足が原因であれば、いい値上がりではありません。国民が安定的な生活を送るためには、食料価格が一定であることが必要です。農業補助金はそのためにあるものだと思います。

今年は、今後一〇年間の「基本計画」づくりの年ですが、供給力をいかに維持していくかは大きなテーマだと思います。第二次安倍政権発足以降、政府は農家所得倍増を重要課題として掲げてきました。この問題、確かに農家にとっては大切です

が、国民にとっての重要課題なのかどうか。重要なのは、それによって食料が安定的に供給できるかです。

広瀬 手段と目的をはき違えてはいけない、ということですね。

合瀬 特に若い人たちがいなくなり、少ない担い手で、生産量を維持するためには、機械化を進めるなどの、効率的な農業を目指すしかありません。まさに、そのための基盤整備が重要です。

私らが取材していた当時、土地改良事業は時間がかかり、いろんな条件どおりにやらないと補助金が下りないとか、規格化された農地で使い勝手が悪い、そんな状況でした。

広瀬 コスト縮減、事業計画の評価などを通じて改革がなされ、使いやすくなりましたが。

合瀬 このところ、畑地が増えてはきましたが、やはりコメが重視されすぎてきた。機械化をみても、コメだけが唯一、体系化されていて、需要が伸びる野菜はさっぱりです。

広瀬 二〇年前の青森県には、ナガイモなど根菜類の機械化が進んで大規模な野菜農家がありました。でもまだまだなのでしょうね。

合瀬 野菜で一番手間のかかるのは、調製作業と箱詰めです。ネギなんか一本一本寸法を選り分けて束にする作業などを機械化できればいいのでしょうか。

広瀬 あるいは古い価値観を取っ払うか。

合瀬 さっきのメロンのように、どうせ食べるの

はカットフルーツと、考え方を変えていけば、生産性はどんどん上がります。一〇年ほど前、キャベツの収穫機を見せてもらいましたが、こんな小さななかったのかと、驚くほど初期のものでした。農地整備ありきではなく、こういう機械体系のためにはどんな整備が必要か、セットで考えないといけないと思います。

広瀬 営農体系に応じた、ストーリーのある基盤整備がまだまだ足りないのですね。

合瀬 とにかく今なすべきは、生産性をいかに上げるかです。日本の農業技術は世界でもトップレベルと思いますが、農産物を安定的に作る技術は、海外の方が上手です。生産性もずっと上です。

土地の狭い日本で、海外農産物に勝つには付加価値が必要だったことはわかります。ですが、人口減少の時代に入ると、そういう技術プラス、安定的、しかもコスト削減しながら、どう作るかという技術も同時に進めないとバランスが取れません。

地域の知恵の集積、食へのこだわり

広瀬 合瀬さんは、地域食材の話ですとか、食への関心も旺盛ですね。

合瀬 農業と食は切り離せませんからね。私は取材で全国を回るのが楽しみですが、郷土料理を食べれば、その地方のことはよく分かります。地域の多様性、独自性こそ日本の豊かさを表しています。

すし、いろいろあるからこそ、日本は面白いのではないのでしょうか。

広瀬 独自の食文化を守り、充実・拡大させていくのが地域の発展につながりますね。

合瀬 農業問題には関心がなくても、食べ物話には視聴者の関心は高いです。おいしいとかおいしくないとかだけでなく、いろいろなストーリーが詰まっているからです。

先日、瀬戸内海の小豆島を取材したら、親子三人で、今でも手作業でそうめんを作っていた。小豆島は大阪に向かう北前船の最後の寄港地で、



たべもの新世紀 (2001~07)

醤油や昆布の佃煮、最近ではオリーブなどいろんなものを作ってきた所です。食べ物には様々な歴史が詰まっていますし、とても楽しい。

広瀬 グルメ番組では農業は切れていて、川上から川下までのつながりが見えません。

合瀬 でも、食べ物の中には農産物があります。食文化とは、農産物をいかにおいしく食べるかの知恵の集積です。小豆島には小麦があつて、それをおいしく食べる方法の一つとして、そうめんができてきた。各地域どこでもそうですよね。

広瀬 食文化は、食材ばかりでなく器にしろ作り



小豆島手延べそうめんの作業

方にしろ、それぞれつながっています。

合瀬 これまで、豊かさとはいつでもどこでも同じ値段で食べられることでした。学生時代、我が町にマクドナルドや吉野家ができたときは、本当にうれしかった。

しかし、本当の豊かさとは、「選択できる」とことです。価格は高いが質が高いもの、味はそこそこだが安価なもの、多様性こそが豊かさです。どこへ行っても、同じ味ではつまらない。そうした意味では、まさに今、地方が力を発揮する時代になってきていると思います。

広瀬 そういう評価は、自然の中で悪さもしながら学んだかつての合瀬少年の記憶につながっているように感じます。

新たな活力の芽ばえ

合瀬 農業が停滞しているといわれますが、活性化というのは、新しい人たちが新しい知恵を持って、どんどん参入してくる。そういう状態です。

最近、高齢者が農業を辞める一方で、面白い人たちが沢山入ってきています。先日取材した人は、京都大学の病院の医師を辞めてワイン用のブドウ栽培を始めていました。

広瀬 どうして始められたのでしょうか。

合瀬 学会で世界各地を訪れ、その土地のワインを飲んでいたら、どうしても自分で造りたくなってきたそうです。ワイン用ブドウの栽培はそんなに大変ではないそうで、夫婦で2haぐらいできる。

また、各地で増えているチーズ工房は、多くが、その土地の酪農家ではなく、会社を辞め、好きなチーズ作りに外から参入してきた人たちです。農業の経験のなかった人が、5ha、一〇haの農地で野菜を作っています。これまでの農業界にはいなかったタイプの人たちが、やったことのない新しい考え方や方法でと、時代の変化を実感しています。

広瀬 農産物を作って製品化もする。そこに興味を持ち、面白味を感じる人が増えているのは、食文化の知恵の魅力です。選べる豊かさにもつながっていますね。

合瀬 そういう豊かさを求める人が増えてきたのでしょうか。実は渋谷のNHKの前、大都会のど真ん中に、チーズ工房が数年前にオープンしました。そこでチーズを作り、毎日行列ができるほどの人気です。そんな商売ができる時代になってきたのです。

日本のワインも世界から評価される時代になってきました。日本ならではの品種を使っていることもありますが、ものづくりのうまい日本人が、本気になって造るから本場においておいしいワインができるのでしょうか。価格は一本四、五千円と決して安くはありませんが、それに見合うくらい品質も上がっています。

私の友人は六次化を支援する事務局をやるめ、独立して、国産の加工食品や農産物を海

外に輸出する事業を始めました。日本産の調味料や加工食品は、フランスでは大変な人気で、月にチャーター三便では足りなくて、今は月四便と変わったようです。飛騨の山椒、八丁味噌などは大変な人気だそうです。

広瀬 売り方が変わってきたのですか。



長野県東御市のワイン畑



島原地方の高菜漬けの巻き寿司

合瀬 そうですね。しかも地方に面白いものがある。すごい量が売れるとは思いませんが、多様性もあり、何より日本産という強みがある。インバウンドの人たちの多くは、日本での食事を楽しみにしてきていますが、そうした人たちも今、日本の食文化や食材を味わえる地方にこそ、注目していると思います。

広瀬 最近、コメの輸出が伸びています。

合瀬 (株)神明の藤尾社長に、海外でのコシヒカリなどの栽培の可能性を聞いたことがあります。「日本では、コメは収穫したらすぐにコントローエレベーターに運び、乾燥、貯蔵、調製、出荷が一貫したシステムとして行われている。海外でもコメ

はできるが、多くは野積みされ、田んぼに放置される。これでは日本並みの品質は望めない。」そうおっしゃられていました。

本当においしいコメを食べたければ、一貫して管理されている日本産にかなう所はないのではないのでしょうか。

広瀬 青森県を中心に全国から、今や三万tものリンゴが輸出されています。輸出はこれからの一つの道ではないでしょうか。

合瀬 ただ、農業の最大のミッションが国民にいかん安定的に供給できるかと考えた時、輸出をどう位置付けるかは難しい。

輸出は確かに農家のためにはいい。ただ、消費者からすると、補助金を使って良いものを作り、それを海外に輸出するというのは、どうなのでしょう。何のために税金を納めているのかみたいなことになります。

他方、輸出を農家の体力をつける、持続的な農業を創るという意味からいくと、必要なことかなと思います。とても難しい問題です。

新しい時代の国づくりの展望

広瀬 視点を日本全体に広げて、これからの国づくりの展望はいかがでしょうか。

合瀬 日本も含め先進国は今後、文化を売っていく時代になってくると思います。これだけ日本に外国人が来る時代です。モノを輸出するよりは、アジアの豊かな人々を迎えて、いかにお金を

使ってもらおうか。そういう時代に入っていると思うのです。

その時に重要なのは独自性、地域性であり、他にないものを創り出す力です。祭りとか文化とかを含めて地域にあるものをどう発信していくのかも試されていると思いますね。

広瀬 テレビは最大のメディアですよ。

合瀬 いや、今やネットが主戦場です。来日した人が楽しかったことをSNSで発信し、人がまた人を呼ぶといった循環です。テレビも一方通行の時代ではありません。ツイッターなどで番組の感想を言い合いながら、双方向でどう楽しんでもらうか。

地域も同じです。ただ見るだけの観光から、地域の暮らしを体験したり、地方の田舎道を自転車で廻ったりするツアーが人気です。

広瀬 従来からあるものを活かし、守っていく。そんな生き方が、少子高齢化が進んで経済成長は望めない社会にはふさわしいのではないかと思います。

合瀬 出生率を見ても、むしろ地方の方が暮らしやすいことがわかりますね。日本全体でみると一・四三ですが、東京は一・一と最も低く、沖縄は二に近い。沖縄だけでなく、地方はおしなべて高い。

地方で暮らしたいと思っている人は多いと思うのですが、課題はどう仕事を作るかです。今はネットを使って何でもできますし、地方でクリエイ



取材の途中で寄った八幡浜の温泉

タイプな仕事をした方が暮らしやすい。
広瀬 地方の廃校をリノベーションして仕事している若者もたくさんいます。

合瀬 地方に取材に行く時は、自分でレンタカーを運転してあちこちを見ることにしています。例えば、去年豪雨の被災地の復興を取材した帰りに寄り道した八幡浜は、海沿いに素晴らしい光景が

広がっていました。また、佐世保の九十九島の夕陽は忘れられない光景で、地方には素晴らしいところがいっぱいあると思いました。

広瀬 地元の人には普通で、発信するまでに至らず、ヨソ者の眼でしか広まらない。

合瀬 そうですね。その良さは、自分ではなかなか気づかないですよ。でも、今や日本で海外からの観光客がいらない場所はありません。そうした人たちが地域の魅力を見つけ、SNSでその土地の魅力を発信してくれる。地方にとっては、こんなありがたいことはありません。

広瀬 先ほどの小豆島は加工品も含めいろんな素材があつて、夏にはアートフェスティバルも開催されます。知り合いのお母さんが、ボランティアで解説なんかやっているので、そういうふうにして地域が元気になっていくことが、全国各地で起こってくれればいいと思います。

合瀬 私の郷里の佐賀では、フィルムコミッションがタイのドラマの撮影誘致に取り組んで、観光客誘致に成功しています。映画の中では、祐徳稲荷神社に行ったり、呼子のイカを食べたりするなどのシーンがあつて、そうした地域を目当てにタイからたくさん観光客が来ています。LCC（格安航空会社）が増えてきたのも大きいですね。なんと、成田・佐賀空港間は、安ければ五〇〇〇円程度で行

くことが出来ます。

広瀬 そういう足と基盤をもとに、地域の農業や食文化を世界に発信していくことですね。

長時間、貴重なお話をありがとうございました。今後とも、ご活躍を期待申し上げます。



おおせ ひろき
合瀬 宏毅

(NHK 解説委員室 解説主幹)

1959年佐賀県生まれ。山口大学経済学部卒業。NHK入局後、鹿児島放送局、名古屋放送局などで勤務。NHKスペシャル、モーニングワイドなどの制作を担当し、経済番組のプロデューサーを経て、2000年より解説委員。解説副委員長を経て現職。農政ジャーナリストの会前会長、食料・農業・農村政策審議会委員も務められた。